―図画工作科の研究―

加賀美　信行

１　研究主題

「自分の思いを創造的に表し、お互いのよさや価値などを認め、高め合う子供の育成」

２　研究主題について

（１）研究総論との関連

本校研究主題は「ともに学び、学び抜く子供−非認知能力に注目した授業を通して−」である。それぞれの教科において、「ともに学び、学び抜く子供」の姿を育成するために、1年次は子供の学びに向かう力のもとになるであろう「意欲」と学習や課題の取り組みに対する「粘り強さ」に注目し、「意欲」「粘り強さ」に働きかける授業づくりを行った。

「ともに学び」とは、人と関わり合いながら，主体的に学ぶ子供である。自分の考えを友達に伝えること，友達の考えを聞くこと，友達の考えと比べること，友達と協力することなどを学習活動に取り入れることで，教科の学びを深められると考えている。「学び抜く」とは，困難な課題に対してもあきらめずに向き合い，試行錯誤しながら取り組んだり，解決策を考えやりとげようとしたりする子供である。

図画工作科の目標である「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」を育成するために、表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせていくことが大切である。

（２）図画工作科における「意欲」「粘り強さ」について

昨年度の研究より「意欲」「粘り強さ」を以下のように整理した。

「意欲」・・・・自分が表したいこと（主題）を見つけ、表している姿。 よりよい表現を求め思考する姿 他者の表現に関心を向けている姿 「粘り強さ」・・表したいこと（主題）を表すために試行錯誤する姿 友達の表現から自分の表現を見つめなおしている姿

上記「意欲」「粘り強さ」が姿として見られているとき、子供たちは造形的な見方・考え方が働かせていると考える。自分が表したいこと（主題）を見つけ、表す時も、より良い表現を求め思考している時も、他者の表現に関心を向けている時にも、その対象となるものを捉える際に、形や色などの造形的な見方・考え方を働かせている。また、表したいこと（主題）を表すために試行錯誤する時や、自分の表現を見つめなおしている時は、正しく「つくり、つくりかえ、つくる」という図画工作科の本質に迫っていく姿でもある。子供たちが自分のイメージをもちながら、そのイメージに近づけられるように試行錯誤して、意味や価値をつくりだせる授業づくりを大切にしていきたい。

（３）図画工作科で考える「ともに学び，学び抜く子供」の姿について

図画工作科における「ともに学び，学び抜く子供」の姿は以下の通りである。

自分の思いを創造的に表し，お互いのよさや価値を認め高め合い，表したいことを表すために試行錯誤する姿

「自分の思いを創造的に表す」姿とは，「ともに学び，学びぬく」ための出発点ともなる姿であ

ると考える。図画工作科において，造形遊びをする活動のように材料やその形や色などに働きかけることから始まる活動と，絵や立体，工作に表す活動のように自分の表したいことを基に，これを実現していこうとする活動がある。造形遊びをする活動は，児童が材料に働きかけ，自分の感覚や行為などを通して形や色などを捉え，そこから生まれる自分なりのイメージを基に活動をしていく。そして，絵や立体，工作に表す活動では，感じたこと，創造したこと，見たことなどから児童が表したいことを基に表していく。どちらにも共通しているのは，必ず自分が表したい思いやイメージがあるということである。自分の表したい思いやイメージを基に，児童は創造的に表していく。そして，友達とお互いの活動や表現のよさやつくり出したものの価値について認め合い，よりよい表現について交流する中で見つけていったり，お互いに助言し合ったりして高めていく。

「お互いのよさや価値を認め高め合う」姿とは，上記のような友達との関わり合いの姿であり，正しく，本校研究主題にある「ともに学ぶ」姿であると考えている。

また，造形的な遊びをする活動では，児童は一度つくって満足することもあるが，つくっている途中で考えが変わって，つくりかえることもある。次々に試したり，再構成したり，思った通りにいかないときは考えや方法を変えたりして，実現したい思いを大切にして活動する。そして，絵や立体，工作に表す活動では，表したい思いやイメージはあっても，その通りに表すために材料や用具を工夫したり，友達の活動を鑑賞する中で新たな表現方法を思いついたりする中で，自分がもつ思いやイメージと活動とをすり合わせて具体化していく。このように，「表したいことを表すために試行錯誤する」姿は自分の思いやイメージを表すために表現し続けることであり，正しく，本校研究主題にある「学びぬく」姿であると考えている。

以上のような姿が児童から見られるような手立てを追求し，実践していく。

３　研究内容　「ともに学び、学び抜く子供」を育成するための授業について

（１）２年次の研究について

１年次は，絵や立体，工作に表す活動で「SDG モンスターズ」という題材で授業実践を行った。成果としては，題材の設定や計画は，児童が意欲的に取り組むために大きな役割を果たしていた。また，児童が思いや考えを話しやすい発問を多く行えたことにより，児童が自分の思いや考えを言語化して説明する中で，漠然としていた部分を具体的に考えたり，発想を広げたりする手立てとすることができていた。そして，児童が自然と友達と交流し合えるような場や雰囲気づくりを行えたため，自然と近くにいる友達とお互いの作品について交流したり，相談したりすることができていた。ほとんどの児童が、自分で思いついたモンスターを創造的に表すことができていた。

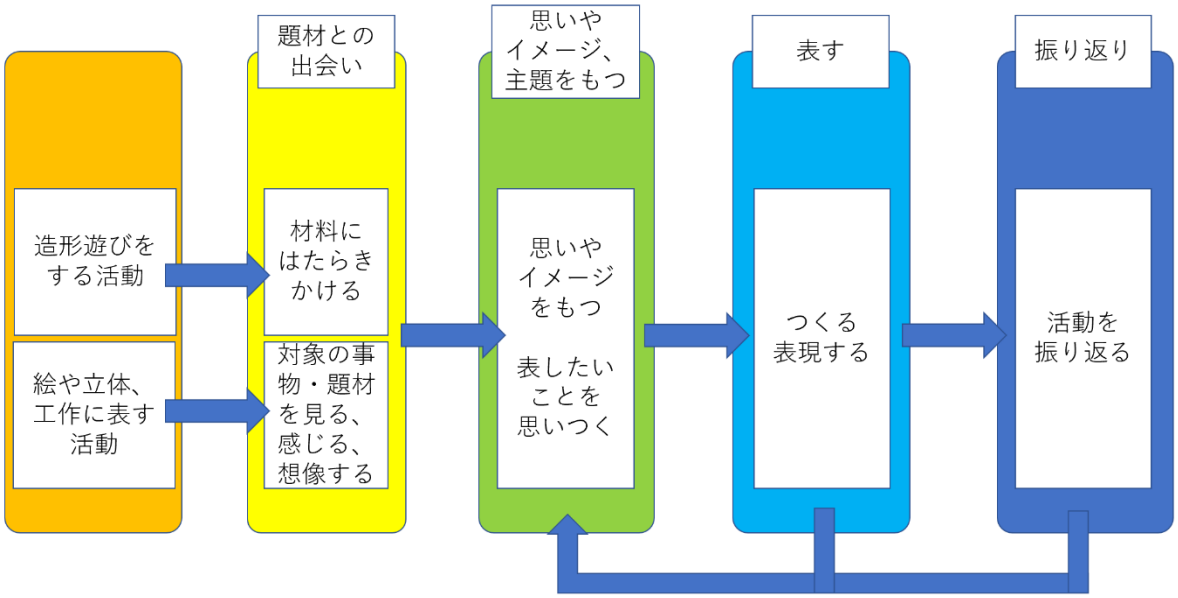
しかし、児童がモンスターを思い描いていく際の、教師の投げかけ方により、一部の児童にとってはハードルが高くなってしまった可能性があり、もっと簡単に身近に考えられるような投げかけ方があったのではないかといった部分が課題となった。児童がもつ創造力に制限をかけないような発問等の投げかけを行うことをもっと意識していくひつようがある。そこで、図画工作科で重視されている児童一人一人の「創造性」に着目し、より一層児童が創造的にのびのびと表現ができるように授業実践を行っていく。

（２）図画工作科における「意欲」「粘り強さ」「創造性」に働きかける授業について

図１のような過程で図画工作科では授業実践を行っていく。「造形遊びをする活動」も「絵や立体、工作に表す活動」もどちらもまず、「題材との出会い」をし、そこから「思いやイメージ、主題をもつ」過程があり、そして児童一人一人がもった思いやイメージ、主題を材料や用具を工夫して「表す」過程があり、学習の最後には自分の「活動

を振り返る」過程がある。また、「表す」過程でも「振り返り」の過程でも、初め表現しようと思っていたことに戻り、新たに思いついたことなどを表すなど、行きつ戻りつを繰り返しながら、自分なりの表現をしていく。

【図１】



（３）２年次の具体的な指導方法の工夫、手立てについて

① 発問の検討

図２に示したような学習過程の中で，それぞれの場面に応じて，児童の創造性や意欲・粘り強さに働きかける発問について，加賀美（2021）を基に１単元や１時間当たりの発問構成表を作成し，児童の実態に合わせて発問をしていきたい。

【図２】

② 友だちと交流する場の設定

図２で示したように，友達と交流する場の設定を，それぞれの場面で必要に応じて，効果的に設定していきたい。友達と交流する中で，児童が友達の活動を参考にしたり，友達の些細な一言から新たなことを見つけたりすることができる場となれば児童も自分が表したい思いやイメージにより近づけられる表現ができると考える。

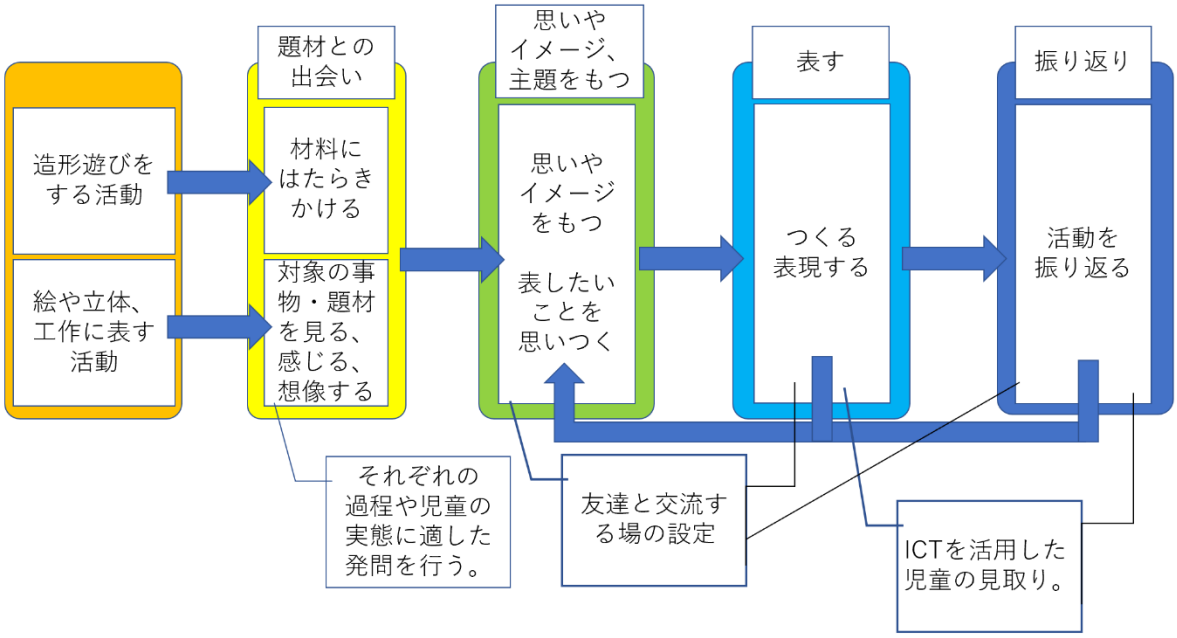
また，友達から自分の表現について肯定的な意見をもらうことができる場となれば，児童はより安心して，自分の表そうとしていることに自信をもって表現することができると考える。

③ ICT を活用した児童の見取り

図画工作科における ICT のメリットとして、ワークシートをデジタル化することで、児童は自分が活動した成果物をその場で写真に撮り、その写真をワークシートに張り付けたり、自分がその時間に工夫したことを打ち込み、その表記したものと写真を線で結んでよりわかりやすくしたりすることも可能である。これにより、文字での表現が苦手な児童にも、自分がその時間、何を考え、どこを工夫したのか記

録に残しやすくなると考える。

以上の手立てを行うにあたり、前提となるのは、児童が意欲的に活動できるような題材設定であったり、安心して活動できるような教師の働きかけや場の設定などがされたりしていることである。これらは、これまでの研究の積み重ねから、児童が意欲的に安心して活動ができるために有効であることはわかっている。これらのことが背景にある上で、上記３つの手立てについて、今年度は実践していく。



〈引用文献・参考文献〉
・文部科学省（2018）「小画工学習指導要領解説　図画工作編」
・小塩真司（2021）「非認知能力　概念・測定と教育の可能性」
・奈須正裕（2017）「「資質・能力」と学びのメカニズム」
・奥村高明，有元典文，阿部慶賀（2022）「コミュニティ・オブ・クリエイティビティ」
・河村茂雄（2022）「子供の非認知能力を育成する　教師のためのソーシャル・スキル」
・南　育子（2021）「子どもとつくる　図画工作」
・岡田京子（2020）「その子は，なにを描こうとしたのか？」
・岡田京子（2015）「学び合い高め合う「造形遊び」」
・日本教育評価研究会（2019）「指導と評価」